

「専守防衛」の呪縛

大平 忠

昨日十二月十六日、政府は新たな「安保三文書」を閣議決定し、「反撃能力（敵基地攻撃能力）」の保有を明記した。夕方の記者会見でも岸田首相は「長距離ミサイルなどで相手国領域内の拠点を攻撃する反撃能力を持つことが抑止に欠かせない」と述べた。日本の従来の防衛基本政策の殻を大きく破ったものであった。

一方で、「『専守防衛』を堅持し、『必要最小限度の実力行使』などの要件を満たした場合に限って反撃能力を行使できる」とも言っている。

「専守防衛」の言葉は、一九七〇年中曽根防衛庁長官が「専守防衛は日本の防衛政策」と宣言したところから始まっている。中曽根は、防衛力の増強に心を砕いた政治家だった。世間の反発に配慮して苦肉の策として生み出した言葉だと思う。

以来、安倍首相に至るまで、歴代首相は全ての防衛政策について「専守防衛」の範囲内と言い続けてきた。

元富澤陸上幕僚長は「専守防衛という言葉は世界では全く通用せず、いささかでも軍事を勉強した者にとっては考えられない」との論を述べており、それを二〇一六年田原総一郎と富澤氏の対談集で知った。

その直後に読んだ、福田恒存が一九七〇年代に表した『滅びゆく日本へ』の中で、「専守防衛」について、辛辣にこう語っている。

「……日本のまはりは全部海で、どこから入ってくるのか分からないのですから、百メートルおきくらいに一小隊配置しなければいけなくなってくる」「合憲論者は『最小限度の防衛力』などといふ冗談で誤魔化さうとしてゐる。これは『最大限度の防衛力』の間違ひではないか」などと手厳しい。

自民党も数ある野党も、この五十年「専守防衛」の意味するところを深く考えたことがあったのだろうか。両者ともに都合のいい言葉として温存してきたのではないか。岸田首相の記者会見を聞いて、あの世で中曽根は「防衛力増強は良しとするか」と苦笑いをし、福田は「今後も誤魔化し続けるのか！」と呆れていることであろう。

(二〇二二年十二月十七日)